

No.43
2024.4.1

テミス(法学部報) *Themis*



CONTENTS

贈る言葉

特集「大学での学び」

永きにわたり

私は法学部生

はじめまして

教員紹介



早稲田大学 法学部

文は人なり

法学部長 田村 達久



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。早稲田大学法学部によろこそ！また、卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。法学部の教職員を代表してお祝いを申し上げます。

新入生のみなさんは、2020年以來の新型コロナウイルス感染症対策の影響で、高校生活のはじめからおわりまでほぼあらゆる場面でいろいろな制限や不自由を強いられました。しかし、そのような状況にあっても、ご自身の将来をしっかりと見つけ、辛抱強く勉学に励まれて早稲田大学法学部に合格し、入学されてきました。心よりお祝いし、かつ、歓迎いたします。

卒業生のみなさんは、入学を目前に控えたときからコロナ禍の影響を直接被りました。入学式そのものが開催されないことにはじまり、誰もそれまで疑うことのなかったごく普通の大学生生活にとっても大きな制約を課されることになり、入学前に思い描いてきた大学生生活を思う存分に満喫することが叶わないことになってしまいました。しかし、目の前の困難な状況に決して屈することなく、将来を見つめて弛まぬ努力を続けられた結果、めでたく卒業の日を迎えられました。社会に出ますと、思いもしなかった様々な難事に直面します。この間の未曾有の困難に立ち向かわれて得られた経験は、必ずみなさんの将来に活かされるでしょう。私たち教職員一同、自信を持ってみなさんを送り出すとともに、あらためてのエールを送ります。

さて、新入生に贈る言葉を述べるがこの欄の本旨ですので、新入生のみなさんに向けてのお話を申し上げますことに進みましょう。

「文は人なり」という言葉はよくご存じでしょう。文章を見ればその書き手の人となりが分かるのだ、ということでしたね。逐一の典拠の指摘は割愛いたします（みなさんが卒業までの間に様々な授業において課される課題に関して提出するレポートではこれは許されませんが、各種の辞典を引いてみると、18世紀フランスの博物学者ビュフォン（Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon）が1753年、アカデミーフランセーズへ入会する際の演説「文体について」の中で、古代ギリシアの修辞学者であり歴史家であるディオニュシオス・ハリカルナッセウス（その代表作は神

話時代から第一次ポエニ戦争を扱った全20巻の『ローマ古代誌』とされます）のことばを引用して、<Le style est l'homme lui-même.>と述べたことでよく知られるようになった言葉であるようです。ちなみに、啓蒙期の自然知識を集大成した『自然誌』（直訳では『一般と個別の博物誌（Histoire naturelle, générale et particulière）』）全36巻がビュフォンの代表作とされます。

ところで、最近では、ChatGPT（Chat Generative Pre-trained Transformer）を典型とする生成系（Generative）かつ対話型のAIを利用して様々な文章を作成することができるようになりました。ちなみに、ChatGPTは、大規模言語モデル（Large Language Models, LLM）と呼ばれるテキストベースの大型AIを基盤として開発されたアプリケーションの一つであって、Webサイト上にデジタルデータとして存在する様々なテキストをはじめとする多種多様なデータを「統計的に」処理して文章を作成しています。

とても便利ではありそうです。しかし、大学での専門的、本格的な学びを始めるみなさんが、これを安易に使い、頼ることによって大事な機会を失ってしまうことを忘れてはなりません。それは何か。いうまでもなく、自分の考えを自らの力で組み立てる論理的思考力、そして、その内容あるいは結果を的確に他者に伝えることのできる表現力を鍛える機会です。いうまでもなく、これらの力は、自分自身で実際に継続的に行わなければ鍛えようのないものでしょう。日々の授業において提出の求められる一編のレポートであったとしても、そこに現れているのは、紛れもないみなさんそのものなのです。みなさんが大学での学びの中において認めるべき文章が、「AI（次第）なり」ということになってはなりません。法学教育をしっかりと行い、かつ、語学教養教育も重要な柱として社会・時代の新たな要請にも適切に応えうるカリキュラムを積み上げてきたこの法学部での学びを通じて、みなさん一人ひとりが、是非とも、その論理的思考力、そして、表現力を大いに高めてくれることを期待しております。

大学での学び

いまいる世界から一歩外へ

岡山 具 隆

大学での学びにおいて、専門的な知識、幅広い教養を身につけることが大切であることは論を俟たないが、物事を広い視野から批判的に捉える力を磨いておくこともとても大切だと考える。すなわち、物事を単一の視点だけでなく、異なる視点から理解し、異なる立場やバックグラウンドの情報を取り入れ、それをもとに情報や意見を検証し、評価する能力である。将来どのような道に進むにせよ、ますます複雑化する社会を生き抜いていく上で必要とされる能力でもある。しかし、それは知識として身につけられるようなものではない。まずは自分のいる世界から一歩外へ出て、異なる環境に身を置いてみることから始めてはどうだろう。私にとっては、留学がそのような貴重な機会となった。

幼少期にすでにドイツに住む経験をしていた私は、ドイツのことはそれなりに理解しているつもりでいたが、留学してみると、初めて気づくこと、戸惑うことが多かった。そうした時に、意識・無意識のうちにに行っていたのがドイツで経験したことを日本でのそれまでの経験と比較することだった。当時は、どちらの方が自分にとってよいだろうか、あるいは合っているだろうかということを考えていたように思う。しかし、おそらくどちらがより優れているかはさしあたりそれほど重要ではなく、簡単に判断できるものでもない。それよりも、様々な違いや自分が感じる戸惑いや疑問自体と向き合い、受け止め、それがどのようなところからきているかを考えてみるの方が大切ではないか、といまでは思う。もしかしたら、留学中はドイツのことと同じくらい、あるいはそれ以上に、日本という国、その社会や文化について考える機会が多かったかもしれない。現地の人々と交流する中で自分が日本のことをいかに知らないか、日本が他の国でどのように見られているか、日本で当たり前のことが、外へ出てみると決して当たり前ではないことなど、多くのことを知り、考えさせられた。このような経験は、その後自分が身の回りの人々や物事と向き合う際の姿勢、何かを判断する際の助けになっているように思う。学生の皆さんにも、大学にいる間に、自分が普段慣れ親しんでいる世界から一歩外へ出て、自分という存在、自分の考えを異なる視点から眺める経験をぜひしていただきたい。留学に限らず、早稲田ではそのような経験のできる場がきっと見つかるはずだ。

私立学校法の改正や生成AI技術の発展・普及などなど、大学における教育研究環境も大きく変化してきております。そうした中、今回は「大学での学び」という特集を組み、法学部の6名の先生方にご執筆いただきました。卒業生の皆さんには今一度4年間の大学生活を振り返っていただき、また新入生の皆さんにはこれからの大学生活を送るうえでの道標にしていただければと思います。

大学で「遊ぶ」ということ

小出 篤

大学で学ぶとは何かという問いは、教員から見れば大学で教えるとは何かということである。私が初めて大学で教える立場になったとき、私の前任だった先生から言われたことは、大学の教員にとってもっとも重要な仕事は学生とたくさん「遊ぶ」ことだ、ということであった。

大学での学びの一つの特徴は、そのあり方の多様性であろう。高校までは、もちろん多少のバリエーションはあるものの、学ぶべき対象はあらかじめ決められていて、日本中どの生徒も基本的に同じである。一方、大学では、何を学ぶか、また、何のために学ぶかは、各自の主体的な選択に委ねられている。同じキャンパス、同じ教室にいても、すれ違う人ごとに学びのあり方は異なるというてよい。

皆が異なる学びをしているのであれば、わざわざ大学という場所に集まって学ぶことの意味はないように思えるかもしれない。しかし、大学という場所の存在意義は、むしろ構成員がそれぞれの関心に従って多様な学びをしているところにこそある。何を何のために学ぶかをそれぞれが選びとっていかなければならないとき、多様な学びのあり方に触れ、より多くの学びの契機を相互に与え合うことは、自分自身の学びのあり方を作っていくために極めて有益であるからである。法学部の同級生はもちろん、異なる専門やバックグラウンドを有する友人や先輩・後輩とも、自分の学びとは一見関係しないようなことも含めさまざまな知見を交換する一つまり「遊ぶ」—ことができることが、大学で学ぶことの大きな意味であろう。幸い、皆さんが学生生活を送る早稲田大学は、そのような「遊び」＝学びの機会にもっとも恵まれた空間の一つであることは間違いない。

ところで、学生一人一人が学びのあり方を模索している大学という場所では、教員は学生に特定の学びを強制するようなことはできない。大学の教員にできることは、自らも大学という場で学ぶ者の一人として、自分が専門としている分野について、学生より少しばかり習熟した学びのあり方を学生に見せることだけである。その意味で、冒頭の先生が私にアドバイスしてくれたように、大学の教員は学生とたくさん「遊ぶ」ことで、なるべく多くの学生に学びの契機を与え、自らも新たな学びの機会を得ることがもっとも重要な仕事なのである。そう考えて、私はこれからも多くの学生諸君と遊んでいきたいと考えている。

グーグルマップの経路を外れてみる

・ 首藤 佐智子 ・

大学での学びに絡めて学生に向けて文章を書くということになってまず思ったのは、今の学生は大学での学びについて実によく知っているということだ。大学という鬱蒼とした森を迷子になりながら歩いていた自分の頃と比べると、今の大学生の大半は驚くほどまっすぐに出口に向かって進んで行く。この変化はインターネットで情報を得ることができるようになり、その情報が「人生のグーグルマップ」を提供するようになったことに負うところが大きい。

私は1985年に米国に留学したのだが、その頃の無知を思うと顔から火が出る思いだ。大学院への入学も可能だったのだが、英語を聞いても全くわからず、話すこともできず、そんな拙い英語力で大学院で学ぶというのは畏れ多い気がして、まず学部に入塾した。それはとんでもない勘違いだった。その後大学院に進んでわかったのだが、大学院では自分の分野の科目だけを履修すればいいので限られた英語でもなんとかやっていけるのだ。学部で多岐に渡る様々な必修科目を履修し、想像もつかないような語彙と格闘し、膨大な課題をこなした悪夢のような日々はなんだったのか。今の時代ならインターネットで情報を収集すればそんなことはすぐに判明することだ。しかしながら後悔はない。むしろ25歳で学部生として数年若い学生に交じって学んだ経験に心から感謝している。

どこか新しいところに行くときは本物のGoogleマップを使う。目的地を入力して経路を見ながら歩き始める。四つ角に来たところで右横の道を見ると美しい桜の大木が満開だ。Googleはまっすぐ行けと言っている。よく見ると目的地は右方面だ。ならばここで右に曲がってもいいではないか。

インターネットは人生のグーグルマップだらけである。最短の距離と最小の努力で目的地に到達する方法に関する情報にあふれている。経路からはずれることには不安が伴う。しかしながら、経路と違う道を示す自分の心の声が聞こえたら、経路からはずれることを恐れない気持ちと、結果として最短距離でない道をとったとしてもそれを選んだ自分を暖かく受け入れるふてぶさしさをもってほしいと思う。

「考え方」を学ぶ

・ 中本 香織 ・

法科大学院に在学していた頃、試験勉強中に一つの疑問が生じ、基本書や演習書をひと通り調べたもののどう考えるべきかがわからなかったことがあった。私は面倒臭がりな性格であるため、当時自分から教員へ質問に行くことは滅多になかったが、どうしても疑問を解消したかったのか、その疑問については3人の先生へ質問することにした。結果、3人の先生から全く同じ答えが返ってきた…のではなく、なんと3人の先生方全員が、異なる考え方と結論を回答として示してくれた。その後、3通りの考え方を持ち帰って最終的に自分はどうかで再度悩み、友人たちとも議論した記憶がある。疑問を解消するまでに時間はかかったが、3通りの回答を貰ったことで、「これが、絶対的な正解がない問題か」と、感動に近い印象を抱いたことを鮮明に覚えている。

大学では何を学ぶのか、挙げればキリがないが、少なくとも大学は、問題に対する「答えだけ」を学ぶところではない。特に法学部の講義やゼミは、結論を学ぶのではなく、結論に至るまでの「考え方」を学ぶことを目的としている。学生時代に、「法律の分野の問題点は、正解がない。暗記するだけでは意味がない。」と多くの先生方から言われていたが、上記の経験は、まさに結論に至るまでの「考え方」こそが重要であると身をもって感じた出来事であった。

教員になり、学生話を聞いていると、「答え」とか「正解」がないことに不安を抱く学生が多いように感じる。授業後に質問を受ける際にも、「〇〇で合ってますか」と正解の回答を求める訊き方をされることが多い。しかし、「なぜ〇〇と考えるのか」、を説明できなければ、〇〇は正解にも不正解にもなり得ないのが、法学の分野である。実際にそのような質問に回答する際は、なぜ〇〇と考えるのか、必ず学生自身の考えも聞かせてもらうようにしている。講義やゼミで扱う問題点は、前提知識が正確に理解できていれば答えは一つとは限らないので、正解がないことに不安を感じる必要はない（ただし、知識を誤って理解しているせいで結論が明らかに誤っている、ということはあるので、「考え方」を学ぶことと正確な知識を学ぶことはセットでなければならない）。授業を受ける際には、教員の話の中でも特に、「なぜそう考えるべきであるのか」についての説明を注意深く聞くと、より授業内容を理解しやすくなるはずであるので、ぜひ試していただきたい。

特異性たちの肯定、普遍への力

・ 守 中 高 明 ・

この国の教育のどこが間違っているか。それは、現在の教育が人間存在の特異性を縮減し、たんなる一般性のもとに包摂される個別性におとしめつつ、仮定された一般性という尺度のみによって「評価」するシステム内に子どもたちや若者たちを捕縛する点にある。

たとえば、小学校から高等学校にいたるまで私たちは、みずからの個性を豊かに育み、かつ、たがいの多様性を尊重する自由な主体であれと呼びかけられる。だが、いっけん良識的に映るこのスローガンこそは、実のところ人間から真の自律性を奪う抑圧的な装置の表現なのである。なぜか。それは、ここで言う「個性」「多様性」「自由」という概念がすべて、ある一般的価値形式《X》を共通の分母としてあらゆる人間を通約＝共約し、たがいに計量＝交換可能な存在たらしめる操作を前提としているから、そしてその操作が産み出す「主体」にしか認められない限定的な概念であるからだ。

この操作は「Aさん・Bさん・Cさん…」という異なる存在を分母《X》によって通約＝共約することによって「X 1・X 2・X 3…」という抽象的存在に還元することにその本質があるわけだが、強く注意しなければならないのは、その《X》が時代や社会に応じて変化する相対的なものであるにもかかわらず、あたかも普遍的なものであるかのように機能するという点である。ヘーゲルは『法の哲学』（1821年）において「人格性」という抽象的形式を受け容れつつみずからを主体化することが「権利能力」の前提だと定義した。「法の命令」とは「一個の人格であれ、そして他者を人格として尊敬せよ」なのだ、と（第1部36節）。だがこの「命令」に従った瞬間、私たちは一般性のもとに包摂される個別性と化し、かつ、社会のマジョリティの基準に過ぎない《X》からの偏差においてつねにみずからの価値を測られることになる。

特異性（singularity）という概念の決定的重要性は、ここにこそある。個別性（particularity）がつねに一般性（generality）を前提とし、後者の部分（parts）であるほかないのに対し、特異性は一般性によっては馴致されず、評価されもしない。それが拓くのはただ普遍性（universality）の地平のみであり、その地平に限界はない。そして〈大学＝University〉における学びの唯一の目的とは、限界なき普遍へむけて特異性たちを解放することなのだ。

特異であれ、すなわち、一般性の枠組みを打ち破る自律した〈力〉であれ——大学はあなたに、そう呼びかけている。

グリーングリーン

山城一真

私は、一族郎党レベルでいけない口です。ざっと直系尊属（すべて北海道在住）を思い出すと、父・母各1名、祖父・祖母各2名、おじ・おば各5名のうち、好んで飲むのは、おじ・おば各1名（いずれも姻族）のほか、父だけでした。

本人がどう思っていたかは知りませんが、父は、傍目でみる限りはくだ巻き系で、虫の居所が悪いことも少なくなく、子どもの私にはどうにも近寄りがたい存在でした。

ところで、父はまた、直系尊属では唯一、大学（関東の私大。大学の名誉のため、どこかは秘匿）を卒業してもしました。私は、根っからの田舎の神童系で、幼少時から大学には行けそうな気がしていましたから、大学がどんなところか、父に聞いてみたことがあります。父は、工学部（？）で勉強していたことを話してくれました。

けれども、父の話聞いた私は、不遜な疑問を抱きました。父が大学で学んだことがその後の役に立っているのか、さっぱりわからなかったのです。その疑問を率直にぶつけたところ、父は、機嫌を損ねることもなく、「大学で一番よかったのは、友達ができたことだ」と、甲類片手に遠い目をして言いました。

私は、友達少ない系でもあります。これは父譲りです。父の友人なんて、ほとんど知りません。唯一、それを見たのが、私が大学入学を控えて、部屋探しのために上京した時でした。同行してくれた父は、一夜、学生時代の親友との交歓の機会を設けていたのです。ホテルのロビーでの再会に居合わせた私は、いいものを見たと思いました。そして、私自身も、大学生活を通じて、少ないながらも大切な友達を得ました。

こんなことを思い出しながら、ああ、「大学での学び」は、机に向かうことだけじゃないのだな、と思ったりしています。

と、そんないい話風にまとめると思ったか。やっぱり、大学ではちゃんと机に向かったほうがいいに決まっているだろう。これが、私の言いたいことです。

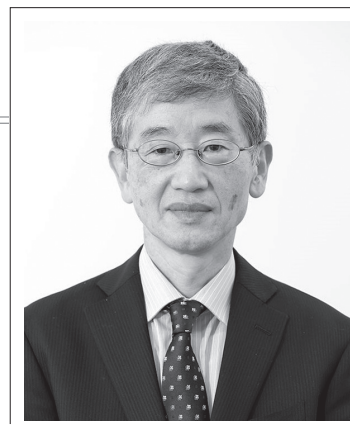
私は、楽な家計でもないのに大学に通わせてくれた父に、いまでも人並みに感謝しています。そして、大学での学びがその後の仕事にもはっきりと活きていることを、幸せに思います。妹（酒飲み）から聞いた話では、父も、そのことを喜んでくれていたようです。

なお、父は生きています。相変わらず——というより、以前にも増して——どうにも近寄りがたいです。冗談もわからない人で、波長が合いません。でも、孝行しなければとは思っています。

永きにわたり

早稲田大学の3回目の「卒業」にあたって

教授 鎌野 邦樹



私は、50年前の1973年に早稲田大学法学部に入
学し、その後、大学院に進学しました。法学部入学
当初は、他大学・他学部 of 著名な先生も一般教養科
目の授業を担当されていたので、法律科目より
も人類学や文明論等の科目を熱心に受講し、また、
他学部の友人から面白い授業の情報を得るとそれら
の科目を受講しました。

私が学生の頃は、法学演習（ゼミ）は2年次から
1年ごとに選択しなければならなかったので、民法
の2年次の「物権法」と3年次の「債権各論」を担
当された篠塚昭次先生の講義に感銘を受け、4年次
には篠塚ゼミに入り、その後、大学院で篠塚先生の
指導を受けました。

私にとって、法学部の卒業が1回目の卒業、大学
院の卒業が2回目の卒業（正確には「単位取得退
学」）です。その卒業後、千葉大学で19年間教員をし、
2007年に早稲田大学法科大学院に戻ってきました。
法学部でも、「鎌野ゼミ」のほか「債権総論」や「土
地法」を担当してきました。そして、2024年3月
の定年退職により3回目の卒業をしました。

最後に、法学部に今年入学した学生や在学中の学
生に対して、早稲田の「卒業生」として、私の経験
を踏まえて話をします。学生の皆さん、在学中のひ
とつひとつの「出会い」を大切にしてください。私
の「出会い」の第一は、友人との出会いです。最も
親しい友人の一人が、2024年3月に私と一緒に「卒
業」した棚村政行先生です。棚村君とは大学院のと

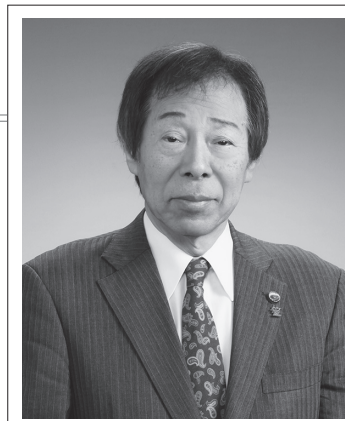
きに机をならべて勉強し苦楽を共にしてきました。
「出会い」の第二は、ゼミ生など様々な学生との出
会いです。ゼミ生ではないのですが、コロナ禍で私
の授業を受講したある学生は、授業も試験もオンラ
インとなるなか、IT技術の進歩により海外からも
授業を受講することができるので、これを期に1年
間、海外の大学に留学しました。このような学生こ
そ現総長のいう「世界に輝く早稲田」の見本だと思
います。「出会い」の第三は、国内の大学の枠を超
えた、また、世界中の研究者との出会いです。私は
外国語が得意ではありませんので、他大学の外国語
が堪能な先生の助けを借りて、10カ国以上の海外
の著名な研究者・法律家と共同研究を実施してきま
した。「出会い」の第四は、早稲田大学の職員の方々
との出会いです。早稲田の職員は、世界で最も優秀
で親切だと思います。私が大学本部の監査室長を務
めていたとき、また、IT弱者である私を助けてい
ただいたときなど、このことを確信しました。

早稲田大学在籍中に、自らの力で、多くの素晴ら
しい「出会い」を掴み取ってください。

2023年度 退職教員挨拶

みなさんへの応援メッセージ

教授 棚村 政行



学生時代から数えて51年間、教員として40年間、早稲田大学の専任教員になって28年という時間がアッという間に過ぎました。恩師や多くの先輩、同僚、後輩、職員、学生 みなさんに支えられて、ようやく定年退職の日を迎えることができました。いろいろとお世話になりありがとうございました。そこで、この間、私に起こった出来事や大切にしている言葉につき学生 みなさんに簡単にご紹介することで、私の皆さまへの応援のメッセージとさせていただきます。さて、私が大学に入学して3年目の夏に、私の父親が白内障の手術後に網膜剥離を患い、その後失明することになってしまいました。私の父は当時新潟県長岡市で弁護士を開業しており、1週間程度の入院で戻れるものと考えていました。しかしながら、予期せぬ事態で、我が家も騒然となり、父親の収入に依存し甘え放題であった私の大学生活も、この出来事を境に一変しました。

そんなときに私が出会ったのが、矢沢幸の「私の中に」という詩でした。「私の中で他人（ひと）の花は咲かない。他人（ひと）の中で私の花は咲かない。私には私の中で私の花が咲く。枯れて行く花が…。そよ風にも散りそうな弱い花。それでもいっしょうけんめいに開こうと努力する弱い花。そういう花を私はかざりたい。」矢沢幸は、ちょうど私の父と同郷で、見附市上北谷村の小学2年生の時に腎結核にかかり闘病生活を繰り返しながら、14歳の時から詩や日記を書き始めました。しかし、高校2年生の

時に腎結核が再発し、21歳という若さで短い人生を閉じました。その矢沢が21年の生涯で命を懸けて書き綴った500編余の文章に触れ、当時の私は心が震えるほどの感動を覚えました。

また、そのようなつらい毎日が続く中で、当時の私の心に突き刺さったのが「人見るもよし。人見ざるもよし。我は咲くなり。」という有名な武者小路実篤の言葉でした。その趣旨を敷衍すると、周りの人が自分のことを理解し評価してくれれば素直にそのことを喜ぼう。しかし、もし他の人がわかってくれないときでも、へこんではいけない。私は自分の与えられた場所で小さな花を咲かせてみせる。当時の私には、矢沢の詩も実篤の言葉もとても素直で、力強く、自立を表している言葉として大いに元気をもらうことができました。最後にどうか、みなさんも、辛いこと、大変なことがあって心が折れそうなときに、この矢沢幸の詩、実篤の言葉を思い起こして、自分自身に言い聞かせてみてください。私は早稲田を去りますが、早稲田で学び、夢を追いかけるみなさんを心から応援しています。

「好奇心」を失うなかれ

教授 水島 朝穂



幼いときから特別の存在だったのは、植物分類学者の叔父だった。小学校の理科で押し花の宿題が出たとき、図鑑を調べても分からない草花を、隣家の叔父の書斎に持っていき、「これ、なんという名前？」と聞くと、叔父は標本ラベルに、和名と科名、それに学名を書き、「ここに採集地と今日の日付、君の名前を書きなさい」といつてくれた。担任の先生は、学名まで記した本格的な標本ラベルに目を丸くしていた。叔父は東京都立大学の牧野標本館の責任者をしてしたが、私が法学部に入学した1972年、47歳で急逝した。私の早大入学をととても喜んでくれた。NHK連続テレビ小説「らんまん」は植物学者の牧野富太郎をモデルにしていたが、その第126話で、膨大な植物標本を大泉の牧野邸から都立大学に移すという話が出てくる。実際にその受け入れと同定をしたのが叔父だった（<http://www.asaho.com/jpn/bkno/2023/1106.html>参照）。ゼミの教え子によると、叔父の口癖は「好奇心」だったそうだ。新種の植物を求めて日本各地や台湾に植物採集に出かけた。そこに植物がある限り、叔父はその「現場」に足を向けたという。

大学教員生活40年のなかで、私が学生たちに求めたのも「好奇心」だった。「奇」という字は「大」の下に「可」がつく。「大きな可能性を好む心」と勝手に解釈している。「どうせ」、「しょせん」、「結局

は」といった「あきらめの副詞」は禁句である。

法学部水島ゼミは、隔年で12回の沖縄取材合宿を実施し、北海道や広島、九州、関西にも足を運んだ。ゼミの取材班が向かうところ、それが問題の「現場」だった。25期生まで400人近くが多分野かつ多方面に進出している。とにかく多士済々、好奇心旺盛で、個性豊かな（時に豊かすぎる）面々である。本学着任直後の本誌15号（1997年3月）に私は、「法学部に沈黙する「こだわりの人材」の発掘と輩出にも努力していきたい」と書いた。わがゼミは、社会のさまざまな分野に求められる「こだわりの人材」を補給する「ミネラル・ウォーター・ゼミ」であり続けたと自負している（<http://www.asaho.com/jpn/bkno/2023/0213.html>参照）。

学生の皆さんには、自分で自分にレッテルを貼ることなく、常に自らの「現場」を求めて、「好奇心」を忘れずにチャレンジを続けてほしいと思う。

私は

法学部生

常識の基準が高いことの非常識

柴垣敬太郎

(2024年3月 法学部卒業)

私は商法箱井ゼミに所属し、野球部で4年間を過ごしました。最終学年では、主務を務めました。

早速ですが、法学部生であったからこそ成長できたことを述べたいと思います。法的文章を書くときには、論理立てて説明することが重要です。これは、複雑な事柄を多くの人ができる限り一様に理解できるようにするためです。私が野球部の主務として活動する中で、それぞれが多様な考え方を持つ部員たちに指示を出す機会が多くあり、最大限同じように理解をしてもらうことが必要がありました。私は論理的な説明に必要な中間の過程・理論などを伝えることが非常に苦手でした。しかし、法学部生として学ぶ中で、考え方のベースが異なる人々が理解できることを意識し続けた結果、野球部での活動にも反映され、説明が少し分かりやすくなったと言ってもらえるようになりました。



2021年、神宮球場での初のベンチ入り

また、私は早稲田大学の体育各部筆頭部の主務として、数多くの経験をしました。簡単に列挙するだけでも、約160名のチームのマネジメント、東京六大学のリーグ戦や全国大会の運営、LAを含む1か月間のキャンプ・高麗大学校定期戦などの取り仕切りなどがあります。これらすべてでかけがえのない出会いをしました。今後AIなどの発展で、法律の世界でも、人の力が必要とされない場面が増え続けますが、最後まで変わらず重要になることは、人とのつながりだと思います。4年間の野球部生活での出会いをこれからも大切にしたいと思います。

最後に、私は、最高峰の集団には、最高峰の考え方・行動を兼ね備えた人がいると考えています。高校生の私にとって、それは早稲田大学法学部であり、早稲田大学野球部でした。4年間を過ごした今でもこの考えは間違っていないと思います。私の隣には常に私よりも見据えるものが高い人がいました。この4年間、常識の基準が高いことの意義を噛みしめてください。出会う方々を大切にし、どこの誰よりも濃い4年間を過ごしてください。



2023年、ドジャースタジアムにて

法律とゴルフに没頭した4年間

城 尚輝

(2024年3月 法学部卒業)

早稲田大学法学部に所属した4年間はとにかく自分の好きな事に没頭することができた貴重な時間でした。

私は高校時代に見たアメリカドラマをきっかけに法律に興味を持ち、大学入学後すぐに法律を学ぶことに面白さを感じるようになりました。その中で自然と法曹を志すようになり、2年次から「法曹コース」に登録し、法律の学習に全力で取り組むようになりました。

そして4年次秋に入試をむかえ、無事に早稲田大学法務研究科への進学が決まりました。夢に向かって一歩前進することができたと思っています。

また、私は10歳からゴルフを始め、中高時代はゴルフ部に所属し、競技ゴルフ一筋でした。大学入学後すぐに体育会ゴルフ部に入部し、熱意ある仲間達と共に学生日本一になることを目指し、日々練習に明け暮れました。そして自身が主将として向かえた3年次にはチーム50年ぶりとなる全国大学対抗戦4位入賞という結果を残すことができました。我々の活動を支援していただいた、クラブの先輩や監督、OB、スポンサー、ゴルフ場関係者の方々には本当に感謝しています。こうした多くの方々と深い信頼関係を築くことができたこと、本当に信頼できる強い絆で繋がった仲間



を持つことができたことは、一生の宝物だと思います。

私が大学4年間で大事に感じたことは「やりたいことをやること」です。大学生は圧倒的な時間的余裕・自由がある上、早稲田大学は挑戦したいことに挑戦できる環境が整っています。だからこそ周りに流されず、自分のやりたいことに向き合い挑戦することがとても大事であると思っています。私も法律の学習と部活動の両立には非常に苦戦しましたが、両者真剣に取り組んだことでたくさんのものを得ることができたと考えて

ています。私は早朝の時間を活用することを特に意識し、自分のやりたいことにかかる時間を確保するようにしていました。

この最高の環境で充実した大学生活を送ることができたこと、何よりも嬉しく思っています。皆様にもこの貴重な環境を活かし、大学生にしかできないことに積極的にチャレンジしていただきたいです。少しでもお力になれば幸いです。



気持ちも新たに

教授 **大澤 裕** 2024年4月嘱任



2024年4月に着任しました大澤裕です。刑事訴訟法を専門としています。犯罪の捜査や裁判を扱いますので、学生の皆さんにも馴染みのある法分野かと思います。教壇に立つようになってからの大学教員としてのキャリアを振り返ると、名古屋大学で16年半（1990年10月～2007年3月）、その後、東京大学で17年（2007年4月～2024年3月）を過ごし、このたび本学に参りました。これまで、学生として学んだり教員として教えたりという形での本学との関係はありませんでしたが、なぜか子供のころから本学に対しては、漠然とした「親しみ」を抱いてきました。特にラグビーや駅伝などの学生スポーツに関しては、ずっと早稲田「推し」を貫いてきましたので、このたび、本学の一員に加えていただけたことをたいへん光栄に思っています。

今回、本学に移ることで、自分の大学教員としての仕事において、重要な変化が1つ生じます。それは、日々お付き合いする学生の皆さんの範囲です。前任校では、主として法科大学院の授業を担当していました。また、教養課程と専門課程とが学部として分かれ、キャンパスも異にしていたから、役職者として挨拶するような特別な場合を除き、大学1・2年生と接する機会がほとんどありませんでした。4年一貫、同じキャンパスで学ぶ本学では、導入演習等を通じ、最もフレッシュな皆さんとも接することになりますし、所属の関係上、法学部の授業担当も増えます。名古屋大学時代以来のことで、楽しみな反面、緊張も感じているところです。あの頃のような「やんちゃ」をするには分別が過ぎ過ぎましたが、早稲田に集う元気溢れる皆さんからエネルギーをもらいつつ、心機一転、「新人」の気持ちで、新たな仕事に挑戦したいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

教授 **酒井啓亘** 2024年4月嘱任



2024年4月に着任しました酒井啓亘ひろのぶです。専攻は国際法で、法学部では国際経済法を担当します。

出身は北海道・帯広市で、子供のころは親の仕事の都合により道内を転々とした転校生の生活を送りました。どんな環境に投げ込まれても何とかなるだろうと考える楽観的な性格は、その当時の経験のなせる業なのかもしれません。そして大学進学のために道外へと進出し、そこでひょんなことから国際法と出会うことになり、その魅力に取りつかれて研究者の道へと進み、現在に至っています。

私の研究は、国際機構の国際法上の地位や能力に関する問題を出発点として、具体的には理論（国際機構法と条約法や紛争処理法との交錯）と実践（国連平和維持活動や集団安全保障の法的考察）の双方からアプローチすることによりこの問題を分析してきました。その後、オランダ・ハーグの日本国大使館における専門調査員としての経験から国際司法裁判所を中心とした国際裁判手続と国際紛争処理について考察を深めたほか、海洋法や領域法にも研究対象を広げています。これらに加えて、経済安全保障及びサイバー活動の国際法上の規律が目下の研究テーマです。

このたび、望外のことに早稲田大学で教育・研究を行う機会をいただきました。最初の赴任先の神戸大学で12年間、その後、京都大学に移って19年間教育・研究に従事し、ここ早稲田大学での教育・研究活動が、これまでの国際法学者としての私の人生の集大成になります。とはいえ、私なりに新しく挑戦することも多く、学生の皆さんや教職員の方々とともに、楽しく充実した教育・研究生活を送ることができるよう努力したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

楽しい法

教授 水町 勇一郎 2024年4月嘱任



この3月に出した本は、次の事例から始まる。

「大学2年生の岩倉さんはカフェ・フログでアルバイトをしていたところ、次のような出来事が起こった。／①火曜、金曜、日曜の週3日勤務と言われていたのに、勝手にシフトを変えられて、土曜日の伊藤さんとのデートに行けなくなった。／②趣味のキャンプに出掛けるために2日間だけ休ませてくださいってお願いしたら、店長の中野さんから『そんなの無理。お店の状況をみたらそんなことぐらいわかるでしょ』と言われた。／③お店に自転車に向かってる途中、道を歩いていたイケメンについつい目が行ってしまい、段差にハンドルをとられて転倒し、骨折した。／④『もうこんなお店、辞めます』と中野店長に言ったら、『忙しくて人手が足りないのはわかってるでしょ。辞めたいなら次の人をみつけてきて』と言われた。／こんなとき、岩倉さんはどうすることもできないのだろうか？」

この本のタイトルは『労働法〔第10版〕』。

労働法は、このように、皆さんの日常生活に深くかかわっている。同時に、労働法は、経済学の祖アダム・スミスが述べたように、国の経済や国民の豊かさにかかわる法でもある。現代の日本では、「働き方改革」として日本の経済や社会のあり方にかかわる重要な政策課題となっている。そして、その根底部分は、近代社会学の祖マックス・ウェーバーが述べたように、人々の宗教観や倫理観とも深く結びついている。

労働法を勉強するのは、いろいろな意味で楽しい。他の法との比較はさておき、労働法そのものがリアルで、ダイナミックで、ときに深くて、楽しい。

この4月から早稲田大学に着任しました。早稲田の皆さんといっしょに労働法を楽しく勉強していきたいと思っています。

法学嫌いのために

講師（任期付） 杉田 和正 2024年4月嘱任



法律の勉強が苦手でした。それは、私がもともと法学部ではなく文学部に進学しようとしていたことに加え、今から思えば、法とは一定の歴史社会を前提に成立しているにも関わらず、社会についての十分な認識を欠いたまま、法律の条文の解釈を学ぶことに、戸惑いを覚えたためです。そのような私が、法学部で生き永らえることができたのは、基礎法学との出会いがあったからです。基礎法学とは、哲学・歴史学・社会学といった人文社会科学に加え、近年では自然科学の知見をも援用し、法について研究する、いわば、法学以外の科学と法学の橋渡しをする学問分野です。法学部に入学しながらも、法学以外の分野を幅広く学びたいと思っていた私にとって、基礎法学はその要求に応えてくれるものでした。そして、基礎法学の学びを通じ、人間の歴史社会について、極めて浅薄ではありながらも、自分なりの認識と問題意識を形作るにつれ、そうした歴史社会の上に形成される法および法学に対し、徐々に興味をもつことができるようになりました。

憶測ですが、法学部には、司法試験や公務員試験、そして単位のためと割り切って法律の勉強に邁進できる学生がいる一方、学問に漠然とした憧れを抱きながらも、まだ法律に興味をもつことができていない（かつての私のような）学生が一定数いるのではないかと思います。そうした学生の、人文社会科学に対する興味関心を、法学へと橋渡しすることができる（かつて私が受けたような）授業を心掛けていきたいと思っています。そのためには、私自身が基礎法学に習熟していなければなりません。基礎法学者としての自身の研究にも精進する所存です。

教員紹介

「2024年度に法学部で授業を担当される法学部・法務研究科の先生方をご紹介します。データは、2024年4月時点のものです。

【凡例】職名、氏名、顔写真、Email/URL（公開されている先生のみ）、法学部での担当科目、研究テーマ、主な研究業績。



あいきょう こうじ
愛敬 浩二

教授

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
憲法理論、比較憲法

研究業績

「EU離脱問題後のイギリス憲法学における政治的憲法論」山元一ほか編『憲法の普遍性と歴史性』（日本評論社、2019年）、『立憲主義の復権と憲法理論』（日本評論社、2012年）、『改憲問題』（ちくま新書、2006年）、『近代立憲主義思想の原像』（法律文化社、2003年）など



あおき のりゆき
青木 則幸

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
民法財産法（金融担保法のほか、契約自由の制約に関する理論など）

研究業績

「アメリカにおける賃料譲渡制度の史的考察（一）～（五・完）」法研論集95、96、97、100、101号（2000年～2002年）、「アメリカの動産債権担保法と日米のABL取引類型論」NBL1070号（2016年）、「ソフトウェアに違反する法律行為」NBL1128号（2018年）など

aoki@waseda.jp



あきやま やすひろ
秋山 靖浩

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
土地の所有および利用の調整に関する民法の基礎理論、不動産をめぐる民法上の諸問題

研究業績

『不動産法入門』（日本評論社）、『新しい土地法』（編著、日本評論社）、『リーガル・リサーチ＆リポート』『LEGAL QUEST 民法2物権』『民法①総則・判例30』（いずれも共著、有斐閣）、『物権法』（共著、日本評論社）、『債権法改正と判例の行方』（共編著、日本評論社）など



いしだ きょうこ
石田 京子

教授

法学部担当科目
災害と法
ジェンダーと法Ⅰ

研究テーマ
法曹倫理、法社会学、ジェンダー法

研究業績

『第4版 アメリカの法曹倫理：事例解説』（共訳、彩流社2015）、『弁護士キャリアの「ガラスの天井」の構造分析』（ジェンダーと法12号）、『スタッフ弁護士の連携活動における倫理問題』（法律総合支援論叢7号）、『ABA弁護士懲戒実施模範規則の紹介と試訳』（比較法学48巻2号）、『ライフイベントと専門職生活』（『変革期の日本の弁護士』日本評論社2015所収）、『Ethics and Regulations of Legal Service Providers in Japan』（VDM Publishing 2011）



いしだ ちえ
石田 智恵

准教授

法学部担当科目
西語、教養演習スペイン語圏、地域文化Ⅱ

研究テーマ
アルゼンチン都市民衆運動の文化人類学

研究業績

『同定の政治、転覆する声——アルゼンチンの「失踪者」と日系人』（春風社、2020）、『異貌の同時代』（共編、以文社、2017）、『Interpelación o autonomía. El caso de la identidad nikkei en la comunidad argentino-japonesa』（共著、Alteridades、2017）

ishidachie@waseda.jp



いむら けんじろう
岩村 健二郎

教授

法学部担当科目
スペイン語（初・中級）／
教養演習スペイン語圏

研究テーマ
キューバ歴史学・思想

研究業績

論文「『犯罪人類学者』イスラエル・カステジャーノスの初期研究—20世紀初頭のキューバにおけるその人種主義—」『ラテンアメリカ研究年報』第42号、「『文化』の理論と実践—キューバの二つの事例から考える」早稲田大学法学会『人文論集』第58号、「現代キューバにおける「人種」と「歴史」—有色人独立党の反乱（1912）を巡って—」早稲田大学法学会『人文論集』第55号

iwamura@waseda.jp



うえの たつひろ
上野 達弘

教授

法学部担当科目
知的財産権法Ⅱ

研究テーマ
知的財産法、著作権法

研究業績

『著作権法入門（第3版）』（共著、有斐閣、2021年）、『特許法入門（第2版）』（共著、有斐閣、2021年）、『〈ケース研究〉著作物の類似性判断—ビジュアルアート編』（共著、勁草書房、2021年）、『デザイン保護法』（共編著、勁草書房、2022年）、『教育現場と研究者のための著作権ガイド』（単編、有斐閣、2021年）、『AIと著作権』（共編、勁草書房、2024年）

uenot@waseda.jp



うちだ よしあつ
内田 義厚

教授

法学部担当科目
法曹演習、主専攻法学
演習

研究テーマ
民事手続法、特に民事執行法

研究業績

著書『民事執行・安全講義』（きんざい）、『執行関係訴訟の理論と実務』（民事法研究会）など



えぐち だいすけ
江口 大輔

准教授

法学部担当科目
ドイツ語／文学

研究テーマ
近代ドイツ語圏文学

研究業績

『「ジーベンケース」における名前の交換』、『ジャン・パウエル「自叙伝」における固有名「パウエル」』ともに『固有名の詩学』（前田佳一編）、法政大学出版局、2019）、『想像力の参照先』（『シェリング年報』、2014）など



えはら かつゆき
江原 勝行

教授

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
人権と制度の関係、政教分離原則、地域統合と憲法

研究業績

『多元主義法理論の共時性と通時性』（2016年）、『イタリアにおける国家の非宗教性原則と公共空間における宗教的標準』（2013年）、『「E U 立憲主義」とイタリア憲法』（2010年）、『フランスにおける国家の非宗教性原則の運用と共和主義』（2008年）



えんどう そうた
遠藤 聡太

准教授

法学部担当科目 研究テーマ
先端化学技術と法入門 緊急避難論、不処罰事由論

研究業績

「緊急避難論の再検討」刑難57・2（2018年）、「自動運転車による生命侵害と緊急避難」形ジャ58（2018年）、「人工知能（AI）搭載機器の安全性確保義務と社会的便益の考慮」法時91・4（2019年）、「正当業務行為の意義」山口古希（2023年）、「情報刑法Ⅰ」（2022年・共著）

<https://researchmap.jp/endosota/>



おおさわ しんたろう
大澤 慎太郎

教授

法学部担当科目 研究テーマ
民法Ⅰ（総則）／民法Ⅲ（債権総論Ⅰ・Ⅱ）／民法Ⅳ（債権各論Ⅰ）／導入演習／主専攻法学演習 保証（担保）法制、金融取引における当事者間の利害調整に係る法学的アプローチ

研究業績

「民法Ⅲ債権総論（LEGAL QUEST）」（共著、有斐閣、2022年）、「保証の行方―「超高齢社会と担保法」序説―」慶應法学44号（2020年）、「担保保存義務の意義と特約の交錯」『社会の発展と民法学（下巻）』（成文堂、2019年）、「フランス法における保証債務の履行と保証人の保護」早稲田法学91巻3号（2016年）、「フランスにおける保証人の保護に関する法律の生成と展開（1）（2・完）」比較法学42巻2号、同3号（2009年）



おおき まさとし
大木 正俊

教授

法学部担当科目 研究テーマ
雇用差別と法、労働市 非正規雇用の法的保護場法

研究業績

「イタリアにおける均等待遇原則の生成と展開―均等待遇原則と私的自治の相克をめぐって」（日本評論社、2016年）、「外部市場・非正規雇用と労働法制」（日本労働法学会編『講座労働法の再生第6巻 労働法のフロンティア』（日本評論社、2017年）所収）など



おおさわ ゆたか
大澤 裕

教授

法学部担当科目 研究テーマ
刑事訴訟法／導入演習 刑事訴訟法（主に捜査法、証拠／主専攻法学演習（刑法、基礎理論）

研究業績

「ロッキード事件最高裁大法廷判決再考―その証拠能力判断」『井上正仁先生古稀祝賀論文集』（有斐閣、2019年）、「刑事訴訟法の基本問題 第1回～第12回」法学教室439～441、443～447、450、452、453、456号（2017～2018年）



おおつか ただし
大塚 直

教授

法学部担当科目 研究テーマ
民法／環境法 不法行為法・環境法をめぐる法的政策的問題

研究業績

「環境法」（2020年）、「環境法BASIC」（2023年）、「国内排出枠取引制度と温暖化対策」（2011年）、「環境法研究して1号～15号」（2014年～）「環境リスク管理と予防原則」（共編、2011年）、「生活妨害の差止に関する基礎的考察」法学協会雑誌103巻4号・107巻4号（1986-90年）



おおつか ひであき
大塚 英明

教授

法学部担当科目 研究テーマ
会社法／保険法 第三者のためにする生命保険契約の「対価関係」について

研究業績

「会社法のみちしるべ（第2版）」（有斐閣）、「商法総則・商行為法（第3版）」（有斐閣）、「法の世界へ（第8版）」（有斐閣）、「保険法42条に関する少考」（保険学雑誌、日本保険学会）

w164149@waseda.jp



おおば ひろゆき
大場 浩之

教授

法学部担当科目 研究テーマ
民法 不動産公示制度論、物権変動の法的構造、物権債権峻別論批判

研究業績

「不動産公示制度論」（成文堂、2010年）、「物権法講義案（第3版）」（成文堂、2015年）、「時効取得の裁判と登記」（共著、民事法研究会、2015年）、「ドイツ物権法」（共訳、成文堂、2016年）、「物権変動の法的構造」（成文堂、2019年）、「物権法（第3版）」（共著、日本評論社、2022年）、「物権債権峻別論批判」（成文堂、2023年）、「物権法」（成文堂、2023年）

hiro911@waseda.jp



おおもり のぶのり
大森 信徳

准教授

法学部担当科目 研究テーマ
中国語／教養演習 中国古典文学、書論

研究業績

「図説文明史7 宋 成熟する文明」（創元社、2006年）、「虎丘剣池題字考」（『中国古籍流通学の確立―流通する古籍・流通する文化』雄山閣、2007年）、「白玉蟾『盤仙庵序』における『蘭亭序』の反映―同時代の王羲之評価をふまえて」（『中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集』東方書店、2018年）、「米芾『平淡』小考―詩書画の批評に通底する文人の眼―」（『早稲田大学法学会百周年記念論文集（第5巻人文編）』成文堂、2022年）



おはし あさや
大橋 麻也

教授

法学部担当科目 研究テーマ
フランス法 フランスにおける国家の経済関与

研究業績

「フランスにおける一方的行政行為の裁判対象性」日仏法学32号、「フランスの行政判例に見る公役務の識別方法」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一巻』、「独立行政機関とフランス行政法」早稲田法学94巻4号、「フランスの不正競争訴訟における損害について」『知的財産法研究の輪』所収、「『フランス公役務の危機』の構造―国家独占の論理とEU法―」早稲田法学88巻1号、「フランスの不正競争防止法制（1）（2・完）」早稲田法学85巻1号、2号

asaya@waseda.jp



おがた しょう
尾形 祥

教授

法学部担当科目 研究テーマ
手形法・小切手法／導入演習／主専攻法学演習／外国書講読 株式会社における会社支配と企業統治、財団法人ガバナンス

研究業績

「スウェーデンにおける家族保有の下での会社支配」『企業法の現代的課題』（成文堂）、「評議員による役員の実任追求の訴えをめぐる法的課題―学校法人と公益財団法人を中心に―」『早稲田大学法学会百周年記念論文集第二巻民事法編』（成文堂）



おかだ としひろ
岡田 外司博

教授

法学部担当科目 研究テーマ
主専攻法学演習／独占禁止法Ⅱ／独占禁止法時論 独占禁止法・下請法・フリーランスの保護

研究業績

独占禁止法の理論と展開 [2]（三省堂）、独占禁止手続法（有斐閣）、新現代経済法入門 [第2版]（法律文化社）、コンビニフランチャイズはどこへ行く（花伝社）、独占禁止法を学ぶ（有斐閣）など



おかだ まさのり
岡田 正則

教授

法学部担当科目 研究テーマ
行政救済法／主専攻法 行政救済法の歴史分析学演習（行政法）

研究業績

「国の不法行為責任と公権力の概念史」（弘文堂、2013年）、「学問と政治」（共著、岩波新書、2022年）、「行政法Ⅰ 行政法総論」（日本評論社、2022年）、「事例で学ぶ行政法ゼミナール」（法学教室2023年4月号より2年間連載）

m-okada@waseda.jp



准教授

法学部担当科目
ドイツ語／教養演習

研究テーマ
第二次世界大戦後のドイツ文学

研究業績
「文学とは、邪魔をし、混乱させるものである—ギュンター・グラスの小説『蟹の横歩き』について—」(『ドイツ文学』、2007)、「ギュンター・グラスの自伝的小説『玉ねぎの皮をむきながら』試論」(『学苑』、2009)

おかやま とまたか
岡山 具隆



教授

法学部担当科目
刑事訴訟法

研究テーマ
捜査法、刑事証拠法

研究業績
「被疑者・被告人の包括的黙秘権」早稲田大学法学会編『早稲田大学法学会百周年記念論文集第3巻刑事法編』(2022年)、「違法収集証拠の証拠能力の判断方法」『令和3年度重要判例解説』(2022年)など

おがわ よしき
小川 佳樹



教授

法学部担当科目
会社法Ⅰ／外国書講読／主専攻法学演習(商法)

研究テーマ
株主総会をめぐる諸問題、企業会計法 商品先物取引法 営利法人以外の法人組織のガバナンス

研究業績
最近公刊されたものとして、『学校法人ガバナンスの現状と課題』(共編著、日本評論社、2023年)、「分配可能額算定はなぜ「複雑」か」企業会計75巻12号(中央経済社、2022年)、「会社法上の『監査』について」早稲田法学会百周年記念論文集第2巻民事法編(成文堂、2022年)、「配当政策」の開示とその会社法における意義 D&IR21号(宝印刷D&IR研究所、2022年)など

おさき やすひろ
尾崎 安次

osaki@waseda.jp



教授

法学部担当科目
英語／言語学／教養演習

研究テーマ
認知科学、形態論、統語論、言語類型論

研究業績
“Inflectional morphology and syntax in correspondence” (Morphology and Its Interfaces. John Benjamins. 2011); “Agreement and path specification in Icelandic.” (CLS 41. 2008); “Formal aspects of morphosyntax in LFG.” (English Linguistics 24. 2007); “Limits to case” (Competition and Variation in Natural Languages. Elsevier. 2005)

おとぐろ りょう
乙黒 亮

otoguro@waseda.jp www.f.waseda.jp/otoguro/



教授

法学部担当科目
刑事法

研究テーマ
刑法・医事法

研究業績
『安楽死と刑法』(成文堂)、『尊厳死と刑法』(成文堂)、『被験者保護と刑法』(成文堂)、『責任原理と過失犯論(増補版)』(成文堂)、『生殖医療と刑法』(成文堂)、『医療事故と刑法』(成文堂)、『終末期医療と刑法』(成文堂)、『企業犯罪と刑事コンプライアンス』(成文堂)など

かい かつのり
甲斐 克則

skaku@waseda.jp



教授

法学部担当科目
法哲学／グローバル法哲学／主専攻法学演習(法哲学)／外国書講読(英米法哲学)

研究テーマ
法哲学

研究業績
『国際法哲学の復興』(弘文堂、2022年)、「国際社会に法は存在するか?」(瀧川裕英編『問いかける法哲学』法律文化社、2016年)、「法多元主義の問題提起をどう捉えるか」(法哲学年報2018)、「法哲学から戦争を論ずる」(法教509号、2023年)

かく しゅん
郭 舜

skaku@waseda.jp



教授

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
憲法理論(憲法解釈論、民主政論、司法審査論)、表現の自由

研究業績
共編著『憲法裁判の現場から考える』(成文堂、2011年)、『「反多数決主義という難問」の存在意義に関する若干の考察』(憲法理論叢書25、2017年)、「書評：ジャック・バルキン著『憲法期循環論』(The Cycles of Constitutional Time)」(比較法学56巻1号、2022年)

かなざわ たかし
金澤 孝

kanazawa@waseda.jp



教授

法学部担当科目
国際関係法
国際法特論
International Law

研究テーマ
国家責任、紛争の平和的解決、投資の保護・促進、国際海洋法

研究業績
E. McWhinney & M. Kawano, Judge Shigeru oda the Path to Judicial Wisdom (Nijhoff / Brill, 2005)

かわの まりこ
河野 真理子

mkawano@waseda.jp



教授

法学部担当科目
社会保障法

研究テーマ
年金、医療、福祉・介護、生活困窮者支援・生活保護

研究業績
『社会保障再考—(地域)で支える』(岩波新書、2019年)、『社会保障法(第3版)』(有斐閣、2022年)、『相続支援の法的構造』(信山社、2022年。編著)ほか多数

きくち よしみ
菊池 馨実



教授

法学部担当科目
刑法Ⅱ／応用刑法Ⅰ／主専攻法学演習(刑事法)／導入演習

研究テーマ
刑事過失、海上犯罪

研究業績
「欠陥製品回収義務と刑事責任」神山古稀(成文堂)、「海上交通犯罪と過失犯」現刑38号、「密輸と組織犯罪」海上保安体制(三省堂)、「医療事故と刑事責任」シリーズ生命倫理学18巻(丸善出版)、「最近の過失裁判例に寄せて」曹時65巻6、7号、入門刑事法第8版(共編著、有斐閣)など

きたがわ かよこ
北川 佳世子

kitagawa@waseda.jp



教授

法学部担当科目
国際取引法(講義、ゼミ)

研究テーマ
国際金融、電子商取引

研究業績
単著『法律学者の貨幣論』(中央経済社、2023年)単著『国際取引法講義 第3版』(中央経済社、2021年)、「資金決済システムの法的課題」(国際書院、2003年)、共著『International Monetary and Financial Law』(Oxford University Press, 2023年)、『ウィーン売買条約の実務解説 第2版』(中央経済社、2011年)

くぼた たかし
久保田 隆

t-kubota@waseda.jp www.f.waseda.jp/t-kubota/



教授

法学部担当科目
ドイツ語

研究テーマ
フェロー語

研究業績
「講式の歴史の中の神祇講式と三段『神祇講式』の成立」、早稲田大法学会編『早稲田大法学会百周年記念論文集第五巻人文編』(2022年12月、109-152頁)

グェルベルク ニールス

guelberg@waseda.jp



くろみ さほし
棚澤 能生

kurumi@waseda.jp

教授

法学部担当科目
法社会学／農業法

研究テーマ
持続可能社会への転換と法

研究業績

編著『持続可能社会への転換と法・法律学』（成文堂、2016）、著書『農地を守るとはどういうことか』（農文協、2016）、「物質代謝と法」（比較法研究所『持続可能な世界への法』2020年）、「個体的社会的所有覚書」（『法と社会研究』2021年）



くろき まさひろ
黒沼 悦郎

教授

法学部担当科目
応用会社法Ⅰ／資本市
金融商品取引法・会社法
場法

研究業績

著書『証券市場の機能と不正取引の規制』（有斐閣）、「アメリカ証券取引法」（弘文堂）、「金融商品取引法」（有斐閣）、「会社法」（商事法務）



こい で
肥塚 肇雄

教授

法学部担当科目

先端科学技術と法入門／自動運転事故をめぐる被害者救済と法／先端医療介護サービスと法／先端科学技術と法演習1～4／導入演習

研究テーマ

先端科学技術と法、リスクと法、損害賠償と法

研究業績

「MaaS時代における自動運転事故の民事責任と保険—被害者救済の最適なあり方を指向して」野田博他編『商事立法における近時の発展と展望』pp.69-89（中央経済社、2021）、「日本版MaaSの推進とMaaSサイバー保険—自動運転に対するより高い社会的受容性を指向して」保険学雑誌653号pp.89～117（2021）、など



こい で
小出 篤

教授

法学部担当科目
会社法Ⅱ／主専攻法学
演習（商法）

研究テーマ
会社法・金融法・信託法・電子
商取引法

研究業績

「数字でわかる会社法〔第2版〕」（共著、2021年）、「わが国における銀行・銀行グループの業務範囲規制について」金融庁金融研究センターディスカッションペーパー（2020年）、「商事信託における受託者機能の分担—いわゆる職務分掌型の「共同受託者」を中心に」『信託法制の新時代—信託の現代的展開と将来展望』（2017年）所収、「分散台帳技術と法制度」ジュリスト1529号（2019年）など

koide@waseda.jp



こにし とみかず
小西 暁和

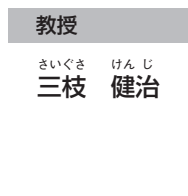
教授

法学部担当科目
刑事政策

研究テーマ
少年法の理論体系的構築

研究業績

「『虞犯少年』概念の構造（1）～（6・完）」早稲田法学79巻3号～82巻1号（2004年～2006年）、「『虞犯少年』に対応するシステムに関する考察」早稲田法学83巻2号（2008年）、「『非行少年』と責任能力（1）～（3・完）」早稲田法学85巻2号～86巻4号（2010～2011年）、「少年に対する不定期刑についての刑事政策論的考察（1）・（2・完）」早稲田法学90巻3号・4号（2015年）など



さいぐさ けんじ
三枝 健治

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
契約法、家族法等

研究業績

「アメリカ契約法における開示義務」早法72巻2号、同3号（1997年）、「ケースで考える債権法改正」（共著、有斐閣、2022年）、「民法5契約（有斐閣ストゥディア）」（共著、有斐閣、2022年）、「Contract Law in Japan」（共著、Kluwer Law Intl、2019年）



さかい ひろのぶ
酒井 啓巨

教授

法学部担当科目
導入演習／国際経済法
／主専攻法学演習（国際
経済法）

研究テーマ
経済安全保障、国際紛争処理、
サイバー活動と国際法

研究業績

『国際法』（共著）（有斐閣、2011年）、「防衛実務国際法」（共著）（弘文堂、2021年）、「ビジュアルテキスト国際法」（第3版）（共著）（有斐閣、2022年）



さかまき ただし
酒巻 匡

教授

法学部担当科目
導入演習／応用刑事訴訟
法／主専攻法学演習

研究業績

「刑事訴訟法（第2版）」（単著、有斐閣、2020年）、「条解刑事訴訟法（第5版）」（編集代表、弘文堂、2022年）、「現代の裁判」（第8版）（共著、有斐閣、2022年）、「入門刑事手続法（第9版）」（共著、有斐閣、2023年）



さわだ けいじ
澤田 敬司

教授

法学部担当科目
英語／地域文化／
旧植民地の歴史・文化

研究テーマ
演劇・映像学／
オーストラリア文化研究

研究業績

著書「現代演劇と文化の混淆」、著書「オーストラリア映画史—映し出された社会・文化・文学」、共編著「演劇学のキーワード」



しぶや けんじろう
渋谷 謙次郎

教授

法学部担当科目
ロシア法

研究テーマ
現代ロシア法全般、ロシア法思
想、ロシア文学と法など

研究業績

「法を通してみたロシア国家」（ウェッジ）、「言語権の理論と実践」（共編著、三元者）、「ロシア多民族連邦制と『多文化主義』」（飯田文雄編『多文化主義の政治学』、法政大学出版局、「ワシーリー・グロスマンと『自由』（『神戸法学雑誌』69巻1号、4号）など

ksawada@waseda.jp

homepage2.nifty.com/wombat



しもだ ひろく
下田 啓

教授

法学部担当科目
英語／教養演習

研究テーマ
近現代日本史

研究業績

Lost and Found: Recovering Regional Identity in Imperial Japan (Harvard UP, 2014); "Tongues-Tied: The Making of a National Language and the Discovery of Dialects in Meiji Japan," The American Historical Review (2010)



しもやま けんじ
下山 憲治

教授

法学部担当科目
行政法／行政救済法

研究テーマ
リスク行政と法、科学技術と行政
法、国家補償法

研究業績

「危機に対応する手法の在り方」公法研究84号（2023年）、「科学・技術の動態性と法治主義に関する省察」本多滝夫他編『転形期における行政と法の支配の省察』（法律文化社、2021年）、「科学・技術水準への準拠義務と国の責任」和田真一他編『現代市民社会における法の役割』（日本評論社、2020年）、「行政法」（日本評論社、2017年）、「リスク行政の法的構造」（敬文堂、2007年）



教授

法学部担当科目
言語学／英語

研究テーマ
語用論、法と言語、社会言語学

研究業績
How to Translate Apology and Non-apology in Legal Contexts: A Linguistic Analysis of Potentially Serious “Subtle Mistranslation” in Japan. *International Journal for the Semiotics of Law* : 32. 「商標の普通名称化問題における言語学的論点」(社会言語科学7:2). The Presupposition and Discourse Function of the Japanese Particle Mo (Routledge).

しゅど さちこ
首藤 佐智子

shudo@waseda.jp www.f.waseda.jp/shudo/



教授

法学部担当科目
民法Ⅱ／主専攻法学演習(民法)／法曹の仕事を知る

研究テーマ
金融担保法、民事実体法の倒産手続における変容

研究業績
「フランスにおける将来債権譲渡と譲渡人の倒産手続との関係」(比較法学43巻2号)、「将来債権譲渡の対抗要件の構造に関する試論」(早稲田法学89巻3号)、「債権担保法制の立法に向けた検討課題」(NBL1198号)など

しらいし だい
白石 大



教授

法学部担当科目
EU法／国際取引法

研究テーマ
EUの法的構造、性質、地域統合の法的側面

研究業績
共編著「国際ビジネスと法」(日評、2009年)、共編著「EU法基本判例集」(日評、2007年)、同「政府規制と経済法」(日評、2006年)

す あ み た か お
須網 隆夫

suamilaw@waseda.jp



教授

法学部担当科目
民事訴訟法Ⅰ

研究テーマ
民事訴訟の心理学的考察、司法統計の歴史的考察

研究業績
民事裁判心理学序説(信山社、1998年)、民事訴訟政策と心理学(慈学社、2010年)、統計から明治期の民事裁判(信山社、2005年)、統計からみた大正・昭和戦前期の民事裁判(慈学社、2011年)

すがわら いくお
菅原 郁夫



講師(任期付)

法学部担当科目
導入演習／外国法特論(ドイツ法)／外国書講読(ドイツの法と社会)

研究テーマ
社会的連帯経済の法社会学

研究業績
「ドイツ協同組合法における協同組合の社会性—2006年改正1条1項を中心に」早稲田法学会誌 70巻2号(2020年)、「市民活動組織としての経済社団—ドイツ民法および協同組合法2017年改正草案を素材として」早稲田法学98巻4号(2023年)

すぎた かずまさ
杉田 和正



教授

法学部担当科目
導入教育科目(演習)／2年法学演習

研究テーマ
刑事帰属論

研究業績
「規範論から見たドイツ刑事帰属論の二つの潮流(上)(中)(下)」比較法学37巻2号～38巻2号、「『帰属を阻害する犯罪』の体系と解釈(1)(2)」愛知学院大学論叢法学研究48巻1号、50巻1号など

すぎもと かずとし
杉本 一敏



教授

法学部担当科目
知的財産法

研究テーマ
知的財産法、国際知的財産法

研究業績
『商標法コンメンタル(新版)』(共編著、勁草書房、2022)、Trade Secret Protection: Asia at a Crossroads (共著、Kluwer Law Int'l 2021)、Patent Remedies and Complex Products: Toward a Global Consensus (共著、CUP 2019)、論文「特許権侵害に対する差止請求権の制限に関する一考察」(2023)、論文「越境的要素を有する行為による特許権侵害」(2023)、論文「著作物の利用に関するプラットフォームの役割と責任」(2022)など

すずき まさふみ
鈴木 将文



教授

法学部担当科目
英語／英文学

研究テーマ
19世紀英文学

研究業績
The Shelleys and the Brownings: Textual Re-Imaginations and the Question of Influence (Liverpool University Press, 2022), “What was all this except the lesson of life?": Browning's *Fine at the Fair* and Shelley', *Keats-Shelley Review* 30.1 (2016) 63-69.

すずき りえこ
鈴木 理恵子

rsuzuki@waseda.jp



教授

法学部担当科目
英語／言語学

研究テーマ
コンピュータ支援語学学習・第二言語習得論

研究業績
Stockwell, G. (2022). *Mobile Assisted Language Learning: Concepts, Contexts & Challenges*. Cambridge: Cambridge University Press. Stockwell, G., & Reinders, H. (2019). Technology, motivation and autonomy, and teacher psychology in language learning. Exploring the myths and possibilities. *Annual Review of Applied Linguistics*, 29(1), 40-51.

ストックウェル グレン

gstock@waseda.jp www.f.waseda.jp/gstock/



教授

法学部担当科目
ドイツ語／教養演習

研究テーマ
近代ドイツ思想

研究業績
「生産力の円環—有機体論としてのドイツ栄養生理学」(『近代科学と芸術創造』行路社、2015)、「統計学と社会改革—エルンスト・エンゲルの『人間の価値』論」(『社会思想史研究』35号、2011)「労働科学者としてのエミール・クレペリン—『疲労との闘争』に見るドイツ産業社会の一断面」(『表象』5号、2011)など

たかおか ゆうすけ
高岡 佑介



教授

法学部担当科目
民事訴訟法Ⅰ／主専攻法学演習(民事訴訟法)

研究テーマ
民事証拠法、訴訟審理原則、非訟事件手続法、集団訴訟制度

研究業績
『自由証明の研究』(有斐閣・2008年)、『ロースクール民事訴訟法(第5版)』(共著、有斐閣・2019年)、『グローバル化と社会国家原則』(共編著、信山社・2015年)、『家事事件手続法(第3版)』(共著、有斐閣・2016年)、『裁判官の私知』の利用禁止について(高橋宏志先生古稀祝賀『民事訴訟法の理論』[有斐閣・2018年]所収)、『ウェブ会議方式の訴訟審理の規律について』本間靖規先生古稀祝賀『手続保障論と現代民事手続法』(信山社・2022年)所収)など

たかだ まさひろ
高田 昌宏



教授

法学部担当科目
Introduction to Labor and Employment Law in Japan、雇用関係法、労使関係法

研究テーマ
労働者代表制度、労使関係法上の「労働者」及び「使用者」概念

研究業績
『労働法 第4版』(共著、有斐閣、2023年)、『デジタルプラットフォームと労働法—労働者概念の生成と展開』(共著、東京大学出版会、2022年)、『従業員代表制と労使協定』日本労働法学会編『講座労働法の再生第1巻労働法の基礎理論』(日本評論社、2017年) 159頁

たちばな ひさし
竹内 寿

hisashi_to@waseda.jp



教授

法学部担当科目 英語／言語学

研究テーマ 言語人類学、詩学、言語とジェンダー

研究業績 『ポエティクスの新展開—ブルリモダルの実践の詩的解釈に向けて』(共編)(ひつじ書房2022); “Pluri-modal poetic performance of banter: The Angama ritual on Ishigaki Island in Japan” in *Humour in Asian Cultures*(Routledge 2022); “Bonded but un-bonded: An ethnographic account of discordance in social relations” in *Bonding Through Context* (John Benjamins 2020)

たけくろ まき こ
武黒 麻紀子

mtakekuro@waseda.jp



准教授

法学部担当科目 導入演習／主専攻法学演習／民事訴訟法Ⅰ／倒産法Ⅱ

研究テーマ 事業再建と倒産法

研究業績 「事業譲渡による再建における清算価値保障原則の意義(1)(2・完)」首都大学東京法学会雑誌59巻1号、60巻1号(2018～2019)、「代替許可における株主の地位」加藤哲夫先生古稀祝賀『民事手続法の発展』(成文堂、2020)所収、「清算価値保障原則と別除権・相殺権の行使」本間靖規先生古稀祝賀『手続保障論と現代民事手続法』(信山社、2022年)所収など

たなはし ようへい
棚橋 洋平



教授

法学部担当科目 仏語／教養演習 映像論

研究テーマ フランス・モダニズム研究、イメージ論

研究業績 著書『詩人とボクサー』、『ロジェ・ジルベール＝ルコント』、論文「細部というアポリア」、『孤島のエキゾティシズムから群島の「驚異」へ』、翻訳 ミシェル・レリス「オランピアの類のリボン」「ゲームの規則Ⅳ 囁音」、ジャン・エシュノーズ「ピアノ・ソロ」

たに まさちか
谷 昌親

masachika_1622@waseda.jp www.f.waseda.jp/tani/myweb/



教授

法学部担当科目 国際私法、国際取引法、主専攻法学演習(国際私法)、2年法学演習(国際私法)、導入演習

研究テーマ 国際不法行為法、英米国際私法の歴史分析

研究業績 『国際不法行為法の研究』(成文堂、2017年)

たねむら ゆうすけ
種村 佑介



教授

法学部担当科目 行政法・地方自治法

研究テーマ 政治・行政システムの改革と公法・行政法理論

研究業績 『地方分権改革の法学分析』、『法務に強くなる！レベルアップ地方自治法解説』、『住民投票』(共著)、『行政手続法』(共著)、『経済行政と公務員法制』 首藤・岡田編『経済行政法の理論』所収、「自治体ガバナンス改革下における自治体監査制度改革の検討」北村他編『自治体政務法務の理論と課題別実践』所収、「国家的公益と地域的公益の対立と調整」法律時報91巻11号、「地方公共団体の再編」公法研究82号

たむら たつひさ
田村 達久



教授

法学部担当科目 刑法／経済刑法

研究テーマ 財産犯論

研究業績 「財産犯における客体と損害概念」刑法雑誌57巻2号(2018年)、「権利行使と財産犯」『野村稔先生古稀祝賀論文集』(成文堂、2015年)、「詐欺罪における財産的損害」『曾根威彦先生・田口守一先生古稀祝賀論文集[下巻]』(成文堂、2014年)、「財産犯の保護法益」神奈川法学43巻1号(2010年)

たやま さとみ
田山 聡美



教授

法学部担当科目 中国語／教養演習

研究テーマ 中国近世文学、近世通俗文芸

研究業績 「白馬モチーフの変奏—二種の白馬宝巻をめぐって」中国文学研究45期(2019年)、「ハーバード大学イェンチン図書館所蔵の宝巻について」中国古典小説研究22号(2019年)、「裁きと神々の接点—『賢良宝巻』の変容にみる宝巻の変遷—」中国文学研究44期(2018年)、「宝巻の流布と明清女性文化」(共著『中国古籍流通学の確立—流通する古籍・流通する文化—』雄山閣、2007年)、単編著『影印・翻字・注釈 搶生死牌宝巻』(中国古籍研究所、2005年)など

つじ りん
辻 リン



教授

法学部担当科目 独占禁止法

研究テーマ 経済法の研究

研究業績 「経済法のルネサンス」(単著、2022年)、「独占禁止法とフェア・コンミ」(共編著、2017年)、「経済法の現代的課題」(共編著、2017年)、「条文から学ぶ独占禁止法(第2版)」(共著、2019年)、「演習ノート経済法(第2版)」(共編、2014年)、「独占禁止法の国際的執行」(編著、2012年)、「政府規制と経済法」(共編著、2006年)、「経済法」(共著、有斐閣、1999年)、「市場と規制改革の基礎理論に向けての一試論」法律時報2003年1月号

つちだ かずひろ
土田 和博

wj7tuti4@waseda.jp



教授

法学部担当科目 中国語／教養演習(中国語圏)

研究テーマ 中国古典文学研究 唐代詩文研究

研究業績 「中唐初期における蘇州文壇の形成についての一考察」松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集、研文出版(2006年)、「杜陵野客と腐儒」生誕千三百年記念杜甫研究論集、研文出版(2013年)、「白居易の青年期における選良意識について」中国文学研究43(2017年)、「徳宗朝・貞元年間における重陽賜宴と韋応物について」人文論集60(2022年)、「韋応物の潯江二洲における治績に関する一考察」中国詩文論叢42・43(2022・23年)

つちや あきお
土谷 彰男



教授

法学部担当科目 民事訴訟法／国際民事訴訟法

研究テーマ 民事訴訟法の諸原則、民事証拠収集法制度の改正問題

研究業績 『読解 民事訴訟法』(有斐閣)、『民事訴訟法理論と「時間」的価値』(成文堂)、『民事訴訟法Visual Materials』(共著、有斐閣)、『「参加の利益」論の現在』法曹時報71巻9号、「我が国の知らない『訴訟担当』の当事者適格に関する覚書」(『加藤哲夫先生古稀祝賀』成文堂)

てしがはら かずひこ
勅使川原 和彦

www.facebook.com/WasedaUniv.SchoolOfLaw.TeshiSeminar



教授

法学部担当科目 導入演習

研究テーマ 国際私法・国際民事手続法の体系化

研究業績 「自分で考えるちょっと違った法学入門(第4版)」(有斐閣、2019年)、「国際私法入門(第8版)」(有斐閣、2018年)「ポイント国際私法総論・各論(第2版)」(有斐閣、2007年、2013年)、「ロースクール国際私法・国際民事手続法(第3版)」(有斐閣、2012年)、「涉外戸籍法リステイトメント」(日本除除出版、2007年)、「ハーグ国際裁判管轄条約」(商事法務、2009年)、「国際契約実務のための予防法学」(商事法務、2012年)

どうがうち まさと
道垣内 正人

dogauchi@waseda.jp https://dogauchi.w.waseda.jp/



教授

法学部担当科目 会社法

研究テーマ 会社法

研究業績 2005年会社法と会社の機関(ジュリスト1315号)、鳥山ほか『会社法』新訂版(学陽書房)、コーポレート・ガバナンスとフランス会社法(上・下)(月刊監査役459・460号)、フランス会社法とコーポレート・ガバナンス論(比較会社法研究／成文堂)など

とりやま けいいち
鳥山 恭一

toriyama@waseda.jp

	教授	
	法学部担当科目 憲法	研究テーマ 経済的自由権、情報法
	研究業績 『財産権の領分』(日本評論社、2007年)、『憲法学における「公共財」』『岩波講座憲法2』(2007年)、『公務の民間化と公務員の労働基本権』論究ジュリスト1号(2012年)、『憲法からみた「国家戦略特区」』世界2014年8月号、『水への権利とは何か』法律時報94巻10号(2022年)、『角馬カトブレバの脚—あるいは自由主義の境域』法律時報95巻0号(2023年)	

なかじま とおる
中島 徹

torun@waseda.jp

	教授	
	法学部担当科目 外国法(英米法)総論/主専攻演習(英米法・EU法)	研究テーマ イギリス公法、EU法、グローバル行政
	研究業績 『イギリス憲法とEC法—国会主権の原則の凋落—』(東京大学出版会、1993年)、『欧州憲法条約—解説及び翻訳—』(衆議院憲法調査会事務局、2004年)、編著『EU研究の新地平—前例なき政体への接近』(ミネルヴァ書房、2005年)、Tamio Nakamura(ed.), East Asian Regionalism from a Legal Perspective (Routledge, 2009)、中村民雄・須網隆夫編『EU法基本判例集(第3版)』(日本評論社、2019年)、中村民雄『EUとは何か(第3版)』(信山社、2019年)	

なかむら たみお
中村 民雄

tamio@waseda.jp

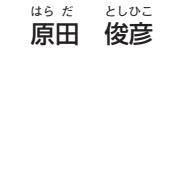
	教授	
	法学部担当科目 商法(海商法)/商法(総則・商行為法)	研究テーマ 海法、国際商取引法の諸問題
	研究業績 『基本講義 現代海商法(第4版)』(2022年)、『海商法(第2版)』(共著、2013年)、『船舶衝突法』(編著、2012年)、『1681年フランス海事王令試訳(1~3)』(早稲田法学81巻4号、82巻1号、2号)	

ほそい たかし
箱井 崇史

htaka@waseda.jp

	教授	
	法学部担当科目 比較憲法	研究テーマ 立憲主義の基礎、放送・通信法制
	研究業績 『憲法の円環』(岩波書店)、『憲法の境界』(羽鳥書店)、『憲法の論理』(有斐閣)	

はせべ やすお
長谷部 恭男**教授**

	教授	
	法学部担当科目 ローマ法	研究テーマ ヨーロッパ中世・近代におけるローマ共和政
	研究業績 『ローマ共和政初期立法史論』(2002年、敬文堂)、『アメリカ合衆国憲法と古典古代』早稲田法学92巻3号(2017年)、『進歩と循環—アメリカ独立革命の歴史認識—』早稲田法学93巻3号(2018年)、『ただ一つの出来事—トマス・ジェファソンの歴史認識—』早稲田法学94巻4号(2019年)	

はらだ としひこ
原田 俊彦

	教授	
	法学部担当科目 国際法Ⅰ/Ⅱ、主専攻法学演習(国際法)	研究テーマ 国家の国際違法行為責任、東アジアにおける国際法秩序
	研究業績 『国際違法行為責任の研究』(2015年)、『日台経済交流と国際法』(2022年)	

ばんざい ひろゆき
萬歳 寛之

	教授	
	法学部担当科目 仏語/教養演習	研究テーマ 環大西洋文化研究
	研究業績 『環大西洋政治詩学 20世紀ブラック・カルチャーの水脈』(人文書院)、『魂の形式 コレット・マニー論』(カンパニー社)、『野蛮の言説 差別と排除の精神史』(春陽堂書店)、『エドゥアール・グリュッサン(全・世界)のヴィジョン』(岩波書店)	

なかむら たかゆき
中村 隆之

	准教授	
	法学部担当科目 導入演習/主専攻法学演習	研究テーマ 判決手続における当事者適格
	研究業績 『訴訟担当概念の比較法的考察と民事訴訟法115条1項2号の適用対象に関する一試論』早稲田法学93巻1号(2017)、『わが国における当事者適格概念の生成過程—判決効との関係を中心に—』早稲田法学94巻2号(2019)、『給付訴訟における権利能力なき社団の原告適格と判決効の主観的範囲』加藤哲夫先生古稀祝賀『民事手続法の発展』(成文堂、2020)など	

なかもと かおり
中本 香織

	教授	
	法学部担当科目 導入演習/2年法学演習(民法)	研究テーマ 判断能力が不十分な成年者の法的保護
	研究業績 『法定後見をめぐる比較法的研究』『現代家族法講座第4巻 後見・扶養』(日本評論社、2020年)、『精神障害者のソーシャルインクルージョン』『持続可能な世界への法: Law and sustainability の推進』(成文堂、2020年)、『成年被後見人の面会交流支援について—近時の裁判例を題材として—』早法97巻1号(2021年)、『イギリスにおける事実婚・同性婚に対する法的対応』税研220号(2021年)など	

はしもと ゆき
橋本 有生

	講師(任期付)	
	法学部担当科目 先端科学技術と私法/導入演習/先端科学技術と法演習	研究テーマ 生殖補助医療におけるヒト胚・配偶子をめぐる課題、ヒト生体試料等の取扱い
	研究業績 『生殖補助医療と親子法 出生する子の出自を知る権利の観点から一生まれてくる子のための医療と法制度のあり方についての一考察—』櫻村政行先生古稀記念論文集(2024年)、『ヒト胚の取扱いに関する動向』年報医学法38号(2023年)、『診療・看護等で得た医療情報およびヒト由来試料等の取扱いに係る論点整理と現場における注意点』(医療事故・紛争対応研究会誌 第14巻(2022年))、『ヒト配偶子に関する権利の性質をめぐる英国判例の分析と本邦への示唆—生殖補助医療におけるno-property原則の例外的展開—』早稲田大学大学院法研論集178号(2021年)など	

はらだ かな
原田 香菜

	教授	
	法学部担当科目 Bridge/Gate/Theme/Advanced/言語学/教養演習(言語情報)	研究テーマ 場の言語学、生成人工知能と大規模言語モデルを活用した英語学習支援、多文化接触場面における食と言語
	研究業績 原田康也、『脳空間(ヘテロトピア)における多文化接触: 約束の「知」に「虚実の相克」のあらんことを』、信学技報 TL2021-46、vol.121、No.440、pp.80-85、2022年3月6日。原田康也、『シロガネーゼ対おたかジェンヌ: カタカナ形態素おそるべし』、信学技報 TL2019-1、vol.119、No.114、pp.1-6、2019年7月7日	

はらだ やすなり
原田 康也

harada@waseda.jp

www.f.waseda.jp/harada/index-j.html

	教授	
	法学部担当科目 法曹演習/主専攻法学演習(刑事法)	研究テーマ 刑事訴訟法、刑法、医療観察法
	研究業績 著書『条解刑事訴訟法(第5版増補版)』(編集委員、弘文堂、2022年)、『陪審・参審制度(ドイツ編)』(共著、司法協会、2000年)、『裁判員裁判と刑法理論—裁判官の視点から—』刑法雑誌55巻2号(2016年)	

ひえだ まさひろ
裨田 雅洋

m-hieda@waseda.jp



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
主専攻法学演習(行政法) 行政法、地方自治法

研究業績
『近代法治国家の行政法学』(成文堂)、『分権改革と自治体法理』(敬文堂)、『リーガルクエスト・行政法(第5版)』(共著、有斐閣)、『行政法事例演習問題教材(第2版)』(共著、有斐閣)、『ホーンブック・地方自治法(第3版)』(共編著、北樹出版)、『世界の公私協働』(共編著、日本評論社)、『公害防止条例の研究』(共編著、敬文堂)、『新基本法コンメンタル地方自治法』(共編著、日本評論社)、『協働型の制度づくりと政策形成』(共編著、ぎょうせい)

ひとみ たけし
人見 剛



講師(任期付)

法学部担当科目 **研究テーマ**
導入演習／先端科学技術と法倫理／先端科学技術と法演習 法哲学

研究業績
「法とは何か」とは何か：メタ法概念論と概念工学(立教法学(104)、2021年)、法理論に関する当為および「法理論の道徳的正当化要求テーゼ」は可能か(立教法学(101)、2020年)、Legal Positivism and the Point of Theoretical Value-Neutrality (Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie Beiheft 161、2020年)

ひらい みつき
平井 光貴



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
応用会社法Ⅰ／応用会社法Ⅱ／法学演習(商法) 商法、会社法

研究業績
『キーワードで読む会社法』(共著、有斐閣)、『Law Practice 商法』(共著、商事法務)、『ストウディア会社法』(共著、有斐閣)、『商法演習Ⅰ—会社法』(共編、成文堂)

ふくしま ひろなお
福島 洋尚

hironao@waseda.jp



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
主専攻法学演習(国際法) 国際刑事裁判

研究業績
『国際刑事裁判権の意義と問題—国際法秩序における革新性と連続性』、村瀬信也・洪恵子編『国際刑事裁判所』(2014年)所収：「稼働を始めた国際刑事裁判所の課題—外からの抵抗と内なる挑戦」『法律時報』79巻4号(2007年)

ふるや しゅういち
古谷 修一

sfuruya@waseda.jp



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
導入演習／外国法総論(中国法)／主専攻法学演習(現代中国法) 中国法、民事責任論

研究業績
『持続可能な農地利用のための農地法制の比較研究』(共編、成文堂、2023年)、『中国不法行為法の研究』(編著、成文堂、2019年)、『入門中国法(第2版)』(共著、弘文堂、2019年)など

ぶん げんしゅん
文 元春



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
独語／教養演習／言語学 外国語教育学、応用言語学、二言語習得、ドイツ語教育研究

研究業績
講座ドイツ言語学 第3巻『ドイツ語の社会語用論』(分担執筆、2014年)、Von den Kommunikationsstrategien zum produktions- und verständnisichernden Handeln. Deutsch als Fremdsprache, 4/2017, 195-201. (共著、2017年)、Interaktionale Kompetenz als Lernziel für Lernende und Lehrende des Deutschen als Fremdsprache. Zeitschrift für Interaktionsforschung in DaFZ, 1(1), 13-34 (共著、2021年)

ほしい まきこ
星井 牧子

mhoshii@waseda.jp



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
刑法総論／刑法各論／法学演習／外国書講読 刑法

研究業績
著書『機能主義刑法学の理論』(信山社)
著書『デンマーク司法運営法』(成文堂)
編著『Methodology of Criminal Law Theory』(Nomos/Hart)
編著『Europe and Japan Cooperation in the Fight against Cross-border Crime』(Routledge)

まつざわ しん
松澤 伸



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
刑法総論／応用刑法Ⅱ／導入演習／法学演習 刑法解釈学、刑法における行為と結果

研究業績
著書『刑法総論〔第3版〕』(2022年、日本評論社)、『刑法各論〔第2版〕』(2021年、日本評論社)、『犯罪概念と可罰性』(1997年、成文堂)、『刑法概説〔第2版〕』(2022年、成文堂)、『刑法の判例・総論』『同・各論』(2011年、成文堂)、『続・刑法の判例 総論』『同・各論』(2022年、成文堂)、『行為主義と刑法理論』(2021年、成文堂)

まつばら よしはる
松原 芳博

matubara@waseda.jp



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
民事執行・保全法／主専攻法学演習(民事訴訟法) 民事訴訟法、民事執行法、民事保全法、倒産処理法

研究業績
『民事執行救済制度論』(成文堂、単著)、『倒産法概論』(法学書院、単著)、『民事執行・保全法概論』(成文堂、単著)、『オーストラリア倒産法』(岡山大学出版会、編著)、『民事模擬裁判ティーチング・マニュアル(初級編)』(慈学社、編著)、『民事訴訟法演習教材』(成文堂、編著)など

まつむら かずのり
松村 和徳



准教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
仏語／教養演習 日本近現代美術、前衛芸術

研究業績
著書：『戦後フランスの前衛たち——言葉とイメージの実験史』(共著、水声社、2023年)、[Mythologies du superhéros : histoire, physiologie, géographie, intermédialités (共著、PUL、2014年)、論文：『Surréalisme et bande dessinée : un rendez-vous manqué?』(『人文論集』59号、2021年)、「日本のシュルレアリスム—固くかつ総合的な芸術運動の試み—」(『ART TRACE PRESS』4号、2016年)

マニゴ ヴァンサン



教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
労働法 労働法の歴史と理論、労働法の比較研究

研究業績
『労働法〔第10版〕』(有斐閣、2024)、『詳解 労働法〔第3版〕』(東京大学出版会、2023)、『労働法入門〔新版〕』(岩波書店、2019)、『集団の再生—アメリカ労働法制度の歴史と理論』(有斐閣、2005)、『労働社会の変容と再生—フランス労働法の歴史と理論』(有斐閣、2001)、『パートタイム労働の法律政策』(有斐閣、1997)など

みずまち ゆういちろう
水町 勇一郎



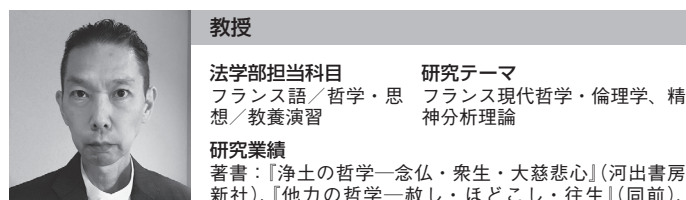
教授

法学部担当科目 **研究テーマ**
英語 エリザベス朝演劇

研究業績
Co-edited with R. Fielding and F. Konno, *Re-Imagining Shakespeare in Contemporary Japan* (Bloomsbury, 2021); co-authored with F. Konno, "The Shakespeare Company Japan and Regional Self-Fashioning," in *Bard Bites* (Edwaard Elgar, 2021).

もとまさ てつひと
本山 哲人

tetsum@waseda.jp



もりなか たかあき
守中 高明

教授

法学部担当科目 フランス語／哲学・思想／教養演習
研究テーマ フランス現代哲学・倫理学、精神分析理論

研究業績

著書：『浄土の哲学—念仏・衆生・大慈悲心』（河出書房新社）、『他力の哲学—赦し・ほどこし・往生』（同前）、『ジャック・デリダと精神分析—耳・秘密・灰そして主権』（岩波書店）、『法』（岩波書店）、『存在と灰—ツェラン、そしてデリダ以後』（人文書院）、『脱構築』（岩波書店）、共著：『変成する思考』（岩波書店）など

morinaka@waseda.jp

准教授

もんでん やすひろ
門田 康宏

法学部担当科目 中国語／中国近代文学
研究テーマ 中国近代文学、文体論

研究業績

『矛盾における西欧文学の受容』『巴金の文体』『主題からみる詩集の構造』



もりもと ひでか
森本 英香

教授

法学部担当科目 環境法
研究テーマ 環境政策、環境法

研究業績

『続 中央省庁の政策形成過程』（2002年中央大学出版）、『里地からの変革』（1995年時事出版）、『人口減少時代に対応した持続可能な社会づくり』（2011年久留米大紀要）、『Citizen's participation in the process of policy-making and its implementation』（2003年 East West Center）



やまぐち なりあき
山口 斉昭

教授

法学部担当科目 民法
研究テーマ 損害賠償法、医事法

研究業績

『医療事故紛争の予防・対応の実務』（共著）、『賠償科学概説』（共著）、『ビジネス法務の基礎知識』（共著）、『交通賠償論の新次元』（共著）、『フランスにおける医療契約と医療被害救済制度』（年報医事法学21号）、『医療水準と法益』（賠償科学34号）



やましろ かずま
山城 一真

教授

法学部担当科目 民法
研究テーマ 民法全般、特に契約法

研究業績

『契約締結過程における正当な信頼——契約形成論の研究』（有斐閣、2014年）、『民法Ⅰ 総則（有斐閣ストウディア）』（有斐閣、2021年）（共著）



やまの め あきお
山野目 章夫

教授

法学部担当科目 応用民法Ⅰ／応用民法Ⅲ／不動産登記法
研究テーマ 土地私法の諸問題

研究業績

『新しい債権法を読みとく』（商事法務、2017年）、『民法概論1民法総則』（第2版、有斐閣、2022年）、『土地法制の改革』（有斐閣、2022年）、『民法—総則・物権』（第8版、有斐閣アルマ、2022年）

yamanome@waseda.jp



やまもと けん
山本 研

教授

法学部担当科目 導入演習／主専攻法学演習／倒産法Ⅰ／民事訴訟法Ⅱ
研究テーマ 倒産法に関する諸問題

研究業績

『民事再生法の実証的研究』（商事法務、2014）、『プロセス講義倒産法』（信山社、2023年）、『時期に関する非義務行為（期限前弁済）の否認における有害性』（『手続保障論と現代民事手続法』（信山社、2022）所収）、『再生計画不認可事由としての「不正の方法」』民事訴訟雑誌69号（2023年）

yken@waseda.jp



ゆげ なおこ
弓削 尚子

教授

法学部担当科目 独語／西洋史／ジェンダー論
研究テーマ ドイツ啓蒙主義、ジェンダー史、「人種」概念

研究業績

『はじめての西洋ジェンダー史』（山川出版社、2021年）、『啓蒙の世紀と文明観』（山川出版社、世界史リブレット2004年）、『ジェンダーのとびらを開こう』（共著、大和書房、2022年）、『論点・ジェンダー史学』（共編、ミネルヴァ書房、2023年）

yuge@waseda.jp



よしだ あきなが
吉田 曉永

講師（任期付）

法学部担当科目 導入演習／2年法学演習／外国語講読
研究テーマ 人権条約の解釈手法、人権条約制度

研究業績

『欧州人権裁判所による発展的解釈の二面性（1）（2・完）』『早稲田大学大学院法研論集』174・175号（2020年）、『人権条約の発展的解釈におけるコンセンサスの役割（1）（2・完）』『早稲田法学会誌』71巻2号・72巻1号（2021年）、『自由権規約委員会における両立しない留保を巡る動態—締約国との「対立」と「対話」—』『国際人権』32号（2021年）



ラーデマッハ クリストフ

教授

法学部担当科目 知的財産権法、国際法律実務
研究テーマ 特許法、知的財産権法、国際ビジネス法

研究業績

デザイン保護法制の現状と課題—法学と創作の視点から—（共編者、日本評論社、2016年）、Patent Enforcement in the US, Germany, and Japan（共著者、Oxford University Press、2015年）、Die gerichtliche Durchsetzung von Patent und Markenrechten in Deutschland, Japan, und den USA（Nomos出版（ドイツ）、2010年）

rademacher@waseda.jp

<http://www.rclip.jp/organization.html>



ローリー ゲイ

教授

法学部担当科目 英語／ジェンダー研究
研究テーマ 日本文学・女性史

研究業績

正親町町子『松陰日記』の英訳 *In the Shelter of the Pine* (Columbia UP, 2021)、*An Imperial Concubine's Tale* (Columbia UP, 2013)、*The Female as Subject: Reading and Writing in Early Modern Japan*（共編著、Michigan UP, 2010）、増田小夜著『芸者』（平凡社、1957）の英訳 *Autobiography of a Geisha* (Columbia UP, 2003)、*Yosano Akiko and The Tale of Genji* (Michigan UP, 2000)

rowley@waseda.jp

www.gayerowley.com



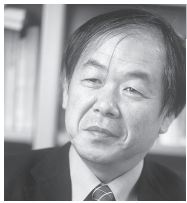
わかばやし やすのぶ
若林 泰伸

教授

法学部担当科目 法学演習（商法）／外国書購読（欧米の金融市場規制）
研究テーマ 証券発行市場規制、公共債の市場法的研究

研究業績

『証券発行市場と相場操縦規制（1）-（9・完）』法研論集91号-96号、98号、102・103号（1999-2002年）、『アメリカにおける証券規制の改革提案』企業と法創造19号（2009）、『監査人に対する虚偽表示・不当な圧力行使の禁止』ディスクロージャー&IR・13号（2020）



わだ よしたか
和田 仁孝

教授

法学部担当科目
法批判への招待

研究テーマ
法社会学理論、紛争処理論、
ADR、医療と法

研究業績

『民事紛争交渉過程論』(1991)、『民事紛争処理論』(1994)、『法社会学の解体と再生：ポストモダンを超えて』(1996)、『医療紛争』(2001)、『リーガルカウンセリングの技法』(2006、共著)、『医療メディエーション』(2012、共著)



わたなべ てつや
渡辺 徹也

教授

法学部担当科目
租税法

研究テーマ
法人税

研究業績

『企業取引と租税回避』(中央経済社、2002)、『企業組織再編成と課税』(弘文堂、2006)、『ベーシック税法(第7版)』(有斐閣、2013)、『組織再編成と租税回避』[租税回避研究の展開と課題](ミネルヴァ書房、2015)、『法人税法132条の2にいう不当性要件とヤフー最高裁判決』商事法務2112-2113号(2016)、『種類株を用いた資金調達—スタートアップ企業の課税問題を中心に』[租税法と民法](有斐閣、2018)、『プラットフォームワーカー・ギグワーカーと課税』ジュリスト1572号(2022)、『スタンダード法人税法〔第3版〕』(弘文堂、2023)



わに かや
和仁 かや

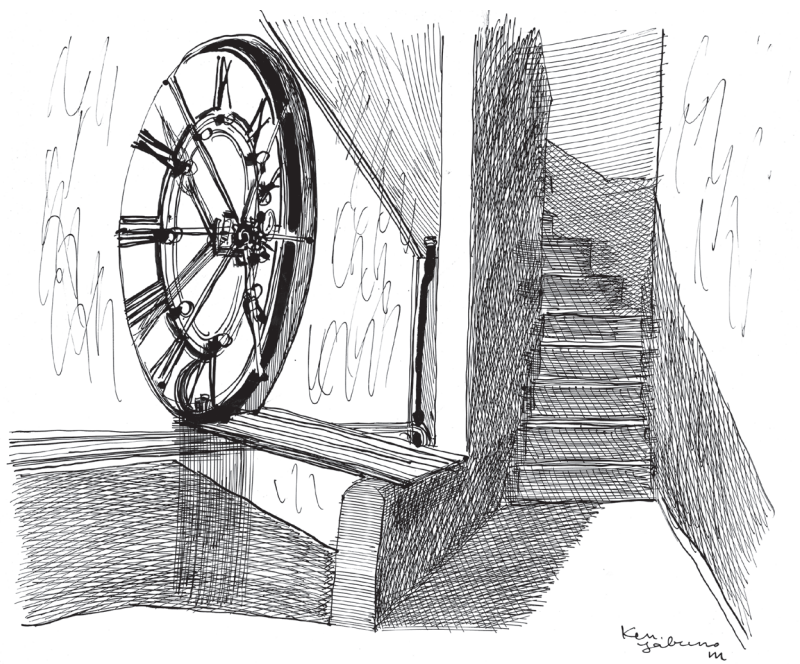
教授

法学部担当科目
日本法史

研究テーマ
近世日本法制史

研究業績

『金田平一郎と九州帝国大学』法政研究83巻3号、「近世前期の評定所裁判—『公法纂例』にみる判断のあり方—」(『幕藩制国家の政治構造』(2016年、吉川弘文館)所収)、『宮崎道三郎と伴信友の「カササギ」—法制史学黎明期へのアプローチ—』神戸学院法学42巻3・4号(2013年)、『「琉球科律」—近世琉球の成文法典—』同40巻1号(2010年)





「早稲田大学法学部報」Themis 第43号

発行日：2024年4月1日

発行所：早稲田大学法学部

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03(3232)4534

URL：<https://www.waseda.jp/folaw/law/>

カット・画：藪野 健 早稲田大学名誉フェロー

発行者：法学部長

田村達久

編集者：法学部学生担当教務副主任

文元春

WASEDA UNIVERSITY